

令和三年俳人協会三重県支部紙上吟行句会成績

令和三年十月

辻 恵美子先生選

特選

爽やかや誓子の浜の松に凭り

福田優子

月の舟ぐらりと傾ぎ闇となる

伊藤泰子

海女潜るあの世この世と往き来して

石井洋子

入選

合宿へ大き水筒広島忌

箱林のぶ子

鍬の刃の白く乾きぬ今朝の秋

島井 節

天を突く小さき拳秋うらら

三田洋子

パンの香やウッドデッキの今朝の秋

延与紀舟

空つぽのバス来て停る麦の秋

山口一世

萩の雨素逝知りたる人も逝き

森下充子

爽やかや空へ踏み込む歩道橋

小川ひとみ

草の花風に吹かれるやうに挿す

佐野弓子

出来秋のモノレール据ゑ千枚田

宮谷ふさ子

腰で潮押し流灯を捧げゆく

石井いさお

今朝処暑の雨脚太き山の池

吉田詮子

添水鳴り闇の硬さを砕きけり

武田巨子

坂口緑志先生選

特選

初雁の空の広がる伊賀の國

橋本石火

紙芝居のもう来ぬ路地や燕去る

土井陽代

入選

綾子忌の近し鶏頭種こぼす

松尾紀子

月の出を待つも七里の渡し跡

近藤昶子

玉虫や滝と手書きの道しるべ

森岡秀美

万緑や岸の向かうに摩崖仏

横山昌子

緋の色はたましひの色雁来紅

佐々木経子

群雀刈田の夕日搔き回す

豊田麻佐子

萩の雨素逝去知りたる人も逝き

森下充子

虫すだく鎖して久しきさまざま園

下村哲朗

空蟬の背に一太刀の致命傷

浅井紀代子

斎王の昔日の香や菊の綿

武田巨子

### 宮田正和先生選

#### 特選

壬申の乱駈け抜けし霧の伊賀

佐々木経子

爽やかや空へ踏み込む步道橋

小川ひとみ

#### 入選

まだ緑一色なりし子蝋螂

山崎 馨

夏惜しむ雲百態の志摩岬

辻本久美子

濡縁の木目に薄日今朝の秋

山中 綾

青ぶだう胸に言葉の満ちて来し

樋口一破

渡り鳥夕日は波にたゆたへり

中島邦子

浸蝕の崖駆け上がる野分波

手塚泰子

海をよみ風読みきつて稚鯽漁わらさ

山口八重

風の秀の高さへ揺るる秋桜

桑原智代美

鶏頭の翳かたむけてけふ終る

上田佳久子

裸子のどこに触れてもやはらかし

山中悦子

石井いさお先生選

#### 特選

ひよろつきに精魂注ぐ祭鬼

平野 透

踊の輪切れしところへ誘はるる

古川和子

#### 入選

斎宮址裳裾模様の大花野

松本愛子

花器となる諏訪湖を艶ふ大花火

小原 隆

城山の一步へ答ふ木の実かな

水谷洋子

新秋や組紐台へ張る百糸

浜地和恵

流星の数多こぼれて冪せず

浅井紀代子

秋晴れや蹠の熱き一万歩

濱浦厚子

葛の花角拭きて牛送り出す

小林青波

マドンナの星加はりて銀河濃し

中山暁代

悉皆屋の看板古ぶ風の色

前田照子

波消しを波が呑み込む野分かな

卯滝文雄

平田冬か先生選

#### 特選

綾子忌の近し鶏頭種こぼす

松尾紀子

炎天を来て律義なる葉売り

森永康子

入選

枝豆や今宵は愚痴の聞き役に

山崎 馨

初雁の空の広がる伊賀の國

橋本石火

忙しげにさも忙しげに法師蟬

池田美智

はじめからまた鳴き通すつくつくし

米野てるみ

手に掬ひ陽の香のすなる今年米

坂本富貴子

何時になくちちはは恋し十三夜

白井洋胡

草の花風に吹かれるやうに挿す

佐野弓子

踊の輪切れしところへ誘はるる

古川和子

悉皆屋の看板古ぶ風の色

前田照子

秋祭鼻のおしろいはにかみて

館多み子

箱林のぶ子先生選

特選

初鴨や今また一羽着水す

谷口ちほ

風の秀の高さへ揺るる秋桜

桑原智代美

入選

雲の峰大志抱けと校歌の碑

金津やよい

夜半の秋島片側に灯の点る

山本孝子

栴檀の若葉や子らへ翼なす

福山良子

小鳥来る生れて初めての笑顔

浜西 修

捨て切れぬ妣のメモ書秋茄子

村山和美

城山の一步へ答ふ木の実かな

水谷洋子

実石榴や憤怒の色に裂けきつて

島井 節

炎天を来て律義なる葉売り

森永康子

腰で潮押し流灯を捧げゆく

石井いさお

裸子のどこに触れてもやはらかし

山中悦子

佐藤 茂先生選

特選

新秋や組紐台へ張る百糸

浜地和恵

湖明り胸にとらへて鳥渡る

駒田弘子

入選

夜半の秋島片側に灯の点る

山本孝子

濡縁の木目に薄日今朝の秋

山中 綾

間口一間開け秋風と小商ひ

岩田光代

寺に行くための吊橋秋日傘

池田縁人

群雀刈田の夕日掻き回す

豊田麻佐子

浮上せる海女に驚く赤とんぼ

松村正之

炎天を来て律義なる葉売り

森永康子

白萩や剥落著き伎芸天

樋口精一

いつの世も風は自在や花芒

伊藤正子

野仏の粗縫ひ帽や初あらし

太田貴美子

尾崎亥之生先生選

特選

半生の日記を処分涼新た

金津やよい

睡眠薬せがむ老父や夜長し

樋口精一

入選

夜半の秋島片側に灯の点る

山本孝子

綾子忌の近し鶏頭種こぼす

松尾紀子

夏惜しむ雲百態の志摩岬

辻本久美子

月の出を待つも七里の渡し跡

近藤昶子

留守番の母へ駄菓子と青みかん

福山良子

枝豆や今宵は愚痴の聞き役に

山崎 馨

初雁の空の広がる伊賀の國

橋本石火

終戦日出征写真の父凜々し

伊藤美枝子

萩の雨素逝知りたる人も逝き

森下充子

終戦日語らぬままに父は亡く

卯滝文雄

松村正之先生選

特選

無言館に裸婦のまなざし断腸花

山下慶子

腰で潮押し流灯を捧げゆく

石井いさお

入選

稲刈つて風生まれると村の人

村田郁夫

半生の日記を処分涼新た

金津やよい

初雁の空の広がる伊賀の國

橋本石火

干魚の色無き風に光りけり

手塚泰子

実石榴や憤怒の色に裂けきつて

島井 節

精霊蟻跡峡に生まれて峡を翔ぶ

三ツ矢龍美

白萩や剥落著き伎芸天

樋口精一

葛の花角拭きて牛送り出す

小林青波

海女潜るあの世この世と往き来して

石井洋子

波消しを波が呑み込む野分かな

卯滝文雄

森下充子先生選

特選

揚げ立てをつまんでゆく子走り諸

福田容子

すぐに脱ぐ子にまた被す夏帽子

梅枝あゆみ

**入選**

踊の輪抜けて落ち合ふ宗祇水

平田冬か

玉虫や滝と手書きの道しるべ

森岡秀美

小鳥来る生れて初めての笑顔

浜西 修

一房は一族のごと黒葡萄

樋口一破

爽やかや空へ踏み込む歩道橋

小川ひとみ

炎天を来て律義なる葉売り

森永康子

城址へは獣道のみ通草の実

草川和子

葛の花角拭きて牛送り出す

小林青波

すいつちよに蹴られてゐたりたなごころ

岡島千秋

波消しを波が呑み込む野分かな

卯滝文雄

**松本愛子先生選**

**特選**

裸子のどこに触れてもやはらかし

山中悦子

流星の数多こぼれて俯せず

浅井紀代子

**入選**

まだ緑一色なりし子蠅螂

山崎 馨

踏み分けて露の玉散る斎宮址

近藤昶子

川幅を狭め鮎追ふ囲ひ網

村田郁夫

伊賀今日も大きく晴れて翁の忌

鈴木秋翠

はじめからまた鳴き通すつくつくし

米野てるみ

萩の雨素逝知りたる人も逝き

森下充子

揚げ立てをつまんでゆく子走り諸

福田容子

一艘に火柱一つ鵜飼川

伊藤孝子

葛の花角拭きて牛送り出す

小林青波

身一つに六感ありて鮑捕る

石井洋子

**梅枝あゆみ先生選**

**特選**

一艘に火柱一つ鵜飼川

伊藤孝子

実石榴や憤怒の色に裂けきつて

島井 節

**入選**

満目の青田を分つ鉄路かな

臼井勉三

半生の日記を処分涼新た

金津やよい

霊山の霧に連なる紀伊大和

松本愛子

千様に色付く稲穂千枚田

羽多野和子

炎天を来て律義なる葉売り

森永康子

極めたる音の造形石取祭

平野 透

空蟬の背に一太刀の致命傷

浅井紀代子

踊の輪切れしところへ誘はるる

古川和子

腰で潮押し流灯を捧げゆく

石井いさお

添水鳴り闇の硬さを砕きけり

武田巨子

安保雅司先生選

特選

鍬の刃の白く乾きぬ今朝の秋

島井 節

白萩や剥落著き伎芸天

樋口精一

入選

夜半の秋島片側に灯の点る

山本孝子

鍵閉めてより轡虫高高し

齋藤千代子

羅に髪ひ上げて南座へ

川村かほる

満目の青田を分つ鉄路かな

臼井勉三

仏間来てゆつくりめぐる黒揚羽

新保笑子

空つぽのバス来て停る麦の秋

山口一世

手に掬ひ陽の香のすなる今年米

坂本富貴子

すぐに脱ぐ子にまた被す夏帽子

梅枝あゆみ

新胡麻を炒れば妣の匂ひなる

樋口良子

波消しを波が呑み込む野分かな

卯滝文雄

高点句 5点

炎天を来て律義なる葉売り

森永康子

高点句 4点

夜半の秋島片側に灯の点る

山本孝子

初雁の空の広がる伊賀の國

橋本石火

萩の雨素逝知りたる人も逝き

森下充子

葛の花角拭きて牛送り出す

小林青波

腰で潮押し流灯を捧げゆく

石井いさお

波消しを波が呑み込む野分かな

卯滝文雄

高点句 3点

綾子忌の近し鶏頭種こぼす

松尾紀子

半生の日記を処分涼新た

金津やよい

実石榴や憤怒の色に裂けきつて

島井 節

爽やかや空へ踏み込む歩道橋

小川ひとみ

白萩や剥落著き伎芸天

樋口精一

踊の輪切れしところへ誘はるる

古川和子

裸子のどこに触れてもやはらかし

山中悦子